

追放会議議事録控

大村伸一

どこかにある古い木造の家の窓のない部屋の中で何かを追放するための会議が行われている。出席者は男性四名女性二名で記憶のない司会役の女はこの数には入っていない。家の近くには海があるらしく波の音は会議の間中聞こえていた。ただ夕立の音がしている間は海の音が聞こえなかったから海はそれほど近くにあるわけではないのだろう。夕立の前か後かにサイレンが鳴り子供達の騒ぐ声が遠くに聞こえた。これらの間会議の出席者はどの音にも驚くことはなかった。何度もこの部屋に来たことがあるのに違いがない。夕食は出前を頼むのだがそのとき注文に悩む者もいなかった。

部屋と厠の間はすこし離れていて廊下をしばらく進んだ後で階段を一度登りその後降りなくてはならない。降りるほうの階段は急で階段と言うよりも梯子というべきべきだ。屋ですら階段の下は光が届かず足元など見えはしない。手すりにしがみつくように降りてゆくとやがて潮のかおりがしてそれからすぐに床に足が触れる。床は湿っているように感じられるがそれは気のせいだろう。湿っているはずの足の裏に直接指で触れてみても少しも濡れてはいない。厠から部屋に戻るときになって最も苦勞するのはやはりその長い階段であり七名の中で最も体重の重い者は一人ではその階段を昇ることができない。それ故その最も体重の重い者はこの会議に出席することになった後実際の会議が開催される前に排泄が不要になるための手術を受けている。

会議は毎月行われていて出席者の顔ぶれはいつも同じだ。黒い服を着てどの出席者も立ち居振る舞いはゆっくりとしており夜になればその部屋には誰も存在しないかのように感じられる。会議の始まる前最初の者が部屋を訪れる前から部屋にはすこし厚みを失った大きめの座布団が人数分並べられている。会議の準備をする者がいるらしい。ただ玄関からこの部屋までまた部屋と厠の間などで会議に出席している七名以外の者に出会うことはない。静かにしていても家の中のその部屋以外の場所で物音がすることはなく少なくとも会議の間はこの家に他の者はいないのかもしれない。座布団に刺繍された模様は熱帯地方に生息する嘴の大きな鳥だが会議の面々はその鳥のことをまったく知らないのか話題にしたことは一度もない。

毎回会議は深夜に及び零時を過ぎる頃には海の波の音に混じって何か金属の碎片が触れ合

うときに起きるようなかすかな音がする。その頃になればすでにバスはなく駅も最後の列車が出てしまっているのでは会議の出席者が帰るための交通機関は船しかなくなる。乗客を求めて船はその家の縁側にまで船体を寄せて来るので船体に当たる波の音が部屋の中でも聞こえる。部屋の襖を開ければ乗船タラップが目の前に用意されているのだろう。船と家の間で行き場のなくなった海水が弾かれ廊下に落ちる音がする。廊下の色が黒ずんでいるのは夜毎海水に洗われていたからなのだろう。海水は廊下だけでなく襖にも当たって何か下品な音を立てるので女性の出席者達はすこし恥ずかしそうにする。船を操る船乗りたちの威勢のいい掛け声はひとつも聞こえずあたかも他ならない波がその船を操舵しているようだ。

船がゆっくりと家の縁側を離れ沖に遠ざかると会議は次の議題に移った。一番小柄な男がいつも議事録を取っており静かな部屋の中に男がノートに鉛筆で文字を書くさらさらという音が響く。男はどこか他の国から来た者らしく男が使う文字は記憶をなくした司会役の女以外誰にも分からない。会議の後配付される議事録もやはりその文字で書かれているので他の出席者は議事録を受取っても何が書かれているのかまったく理解できない。理解できる文字で書いてもらいたいと男に申し出ても男は少しも意に介さず同じ文字を使い続けている。この会議は非常に重要な会議でありこの会議の内容が外部に漏れでもしたらそれは世界的な危機に発展しかねない。だから誰にも読めない文字で議事録を書き続けなくてはならないのだと男は主張している。

司会役の女には記憶がないだけでなく記憶力もないため会議で議決されたことをものの一時間もしない間に忘れてしまうので一番小柄な男の残す議事録を何度も読み返している。司会役の女が議事録の最初に戻って読み始めるたびに小柄な男はちらりとその様子を見て満足そうな表情を浮かべる。会議の参加者の会議にかける意識は高くその男に邪な気持ちは一つもありえないのでありその表情はおそらく自分の作り出したものに対して他の誰かが一心に理解し記憶しようと努力しているというそのことに対する満足だったのだろう。その様子を見ている他の参加者は読めない文字を使うことに頑なになっている小柄な男への感謝の気持ちだと言って毎回鉛筆をプレゼントしている。小柄な男は鉛筆を貰うときありがとうと言うのだがそれが筆記用具だということを知らないのだろう自分の敷いている座布団の下に隠すと二度と手に取ろうとはしない。

会議で最もよく発言するのは細長い顔で背が高くいつも化粧をしていない女だが他のどの出席者よりもちいさな声で話すので発言していることに気づく者は少ない。それでも毎回議事録の半分以上は彼女の言葉で埋め尽くされておりそれを見て初めて彼女が発言していたことに気づく者もいる。ただ議事録は誰にも読めない文字で書かれているので本当に彼女が

発言した内容がそこに書かれているのかどうかは疑わしい。それでも何も話をしていない者の発言で議事録の半分以上を埋め尽くそうとする理由などどこにあるのかと小柄な男が言い募るので細長い顔の女が最も発言をしているのだということに誰も反対を唱えることはない。

すべての議題が終わる頃には夜は明けかけていて家の外では遠くに鳥の鳴き声も聞こえ始める。鳥については出席者の誰もその名前を当てることができない。座布団に刺繍されている熱帯地方に生息する嘴の大きな鳥の鳴き声だと誰かが言い出せば他の全員がそれに賛成しただろう。その鳥の声に促されたかのようにやがて記憶のない司会役の女が会議の終わりを告げると男性四名の出席者は責任を果たし終えた安堵から他の女性出席者に失礼と声をかけ畳の上に仰向けに倒れる。女性達はその姿を見て見ぬふりをしながら帰り支度を始める。バスや電車や旅客船の始発が出る時間にあわせ出席者達はそれぞれ帰ってゆく。最後に残った一番年上の男が座布団を集めて部屋の隅に積み上げ忘れ物がないことを確認して部屋を出る。

玄関に続く長い廊下は一步進むたびにきしんだ音を立てる。中庭は荒れ果てていてあちこちの欠けた灯籠は倒れ池には雨水が少し溜まっているだけだ。魚は一匹も残っていない。途中大きな石の柱が崩れたどこか異国風の廃墟の中を通る。壊れた建造物の隙間からずっと向こうに少しも破壊されていない大きな建物の入口が見えるがそれが何の建物なのかは分からない。やがて男は玄関に辿り着き上り框に揃えられた自分の靴を発見すると会議の準備に心配りをしてくれている者達に感謝しながら靴を履く。男は玄関の戸を開けるとそこで家の中に振り返り大きくおじぎをしてから帰ってゆく。

どこか古い木造の家の窓のない部屋の中で何かを追放するための打ち合わせが今も行われている。追放するのが支配者なのか同じことだが言語なのかあるいは彼ら自身であるのかそれは分からない。それ以外の何かを追放したという話は聞いたことがないけれどその可能性がないわけでもない。会議が決定したものが追放されるのでありそれ以外のものは決して追放されることはない。追放のための最後の会議はいつもそんなふうに行われている。